

第 53 回クラシックを楽しむ会

2018 年 4 月 15 日（日）18:00～（3 時間 8 分、休憩除く）

タイトル：歌劇「コジ・ファン・トゥッテ」（モーツァルト）

ザルツブルク音楽祭 1983

1983 年 8 月

会場等：ザルツブルク祝祭小劇場

楽団等：ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

合唱：ウィーン国立歌劇場合唱団

指揮：リッカルド・ムーティ

演出：ミヒャエル・ハンペ

出演：マーガレット・マーシャル

（フィオルディリージ）

アン・マレイ（ドラベッラ）

ジェイムズ・モリス（グリエルモ）

フランシスコ・アライサ（フェルランド）

キャスリーン・バトル（デスピーナ）

セスト・ブルスカンティーニ（ドン・アルフォンソ）

その他



第 1 幕、恋人達が急に出征してしまい涙にくれる姉妹

あらすじ

二人の青年士官グリエルモとフェルランドは、美しい姉妹フィオルディリージ、ドラベッラとそれぞれ婚約しているが、老哲学者ドン・アルフォンソにそそのかされて、恋人の貞節について賭をすることに。出征するふりを演じて偽りの別れの後、別人に変装して姉妹を口説くふたり。姉妹の心は次第に揺らぎ、妹ドラベッラが姉の婚約者グリエルモに、さらに姉フィオルディリージもフェルランドの口説きに陥落してしまう。新しい 2 組のカップルの結婚式が行われるところに、軍隊の帰還が告げられ出征していた婚約者が現れる。

見せ場と名曲

このオペラのタイトルである「女はみんなこうしたもの（コジ・ファン・トゥッテ）」は第 2 幕終わり近く男性 3 人の合唱で歌われる。序曲はこの旋律を巧みに用いた軽快な魅力で知られる。

全曲の内ほぼ半数が魅力あふれるアンサンブル（二重唱、三重唱、五重唱、六重唱、フィナーレ）でこのオペラの特徴とされる。アリアもデスピーナのアリアなど大変素晴らしい。

第 53 回クラシックを楽しむ会(予告)

タイトル：歌劇「ヘンゼルとグレーテル」（フンパーディンク）

5 月 13 日(日) 17 時 30 分開場、18 時上映開始

ウィーン国立歌劇場 2015 年 11 月公演。指揮はクリスティアン・ティーレマン。ヘンゼルにはダニエラ・シンドラム、グレーテルはイレアナ・トンカ。そしてペーターにはアドリアン・エレート。演出は英国出身のエイドリアン・ノーブル。貧困のため森にすてられた子供たちが、魔女におそわれるも自ら窮地を脱し、無事に家へ戻るといったグリム童話原作のおとぎ話。

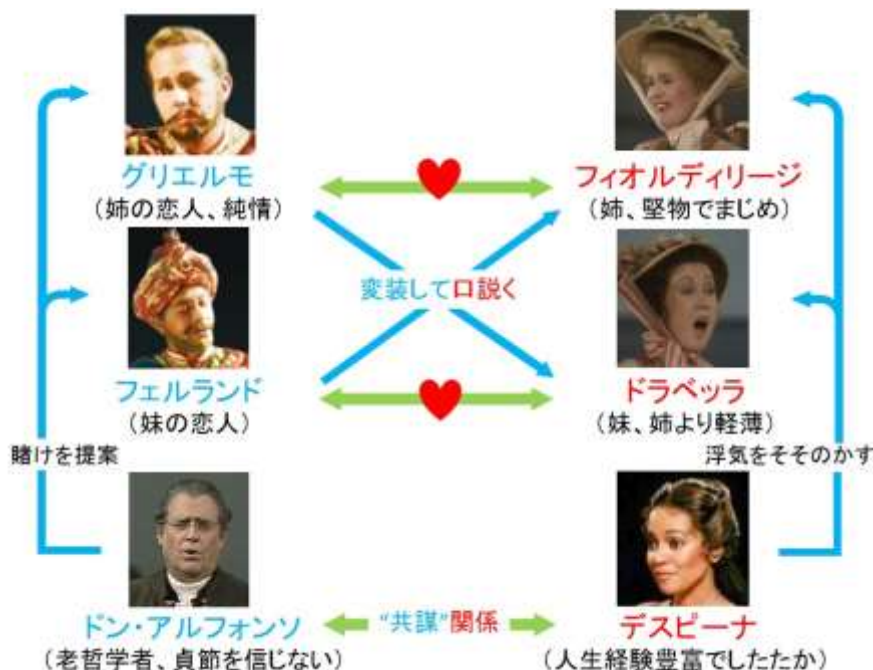
6 月は英国ロイヤル・オペラ 2017「オテロ」、7 月以降、スカラ座 2017「アンドレア・シェニエ」、ヴェローナ野外オペラ 2017「ナブッコ」などを予定。

あらすじ

【時と場所】 18世紀末、南イタリアの港町ナポリ

【主要人物】

- フィオルディリージ (S) : ナポリの貴婦人、ドラベッラの姉
ドラベッラ (Ms) : フィオルディリージの妹
フェルランド (T) : 青年士官、ドラベッラの恋人
グリエルモ (Br) : 青年士官、フィオルディリージの恋人
デスピーナ (S) : 姉妹に仕える女中
ドン・アルフォンソ (Bs) : 老哲学者



【第1幕】 港町のカフェ

二人の若い士官フェルランドとグリエルモが、老哲学者ドン・アルフォンソと言い争いを始める。若い二人は恋人達の貞節を信じているが、アルフォンソは、人間なら女性でもふとした出来心はあると、彼らの純真さを笑う。そこで、どちらの言い分が正しいか賭けをすることに。

アルフォンソは策を練る。彼は、海辺の庭園にいたフィオルディリージ（グリエルモの恋人）と、その妹ドラベッラ（フェルランドの恋人）に、あなた達の恋人が急に戦争に行かなくてはならなくなったと伝え、士官二人には実際に船に乗って出発するふりをさせる。恋人がいなくなって悲しむ姉妹。

アルフォンソは、士官二人をひげを生やしたトルコ人風に変装させ、また、女中のデスピーナにはあらかじめ小遣いを与えて協力させることに。アルフォンソは、変装した二人を姉妹に紹介、二人は姉妹に言い寄るが、悲しんでいる貞節な姉妹は見向きもしない。

【第2幕】 姉妹の居間

デスピーナが部屋で姉妹の世話をしながら、男遊びもよいものと浮気を勧めると、姉妹は、もし選ぶならこっちの人かしら、と話し始め、お互い元の恋人と違う相手を選ぶ。

変装したグリエルモは、フェルランドの恋人ドラベッラを口説き落とす。フェルランドは恋人の裏切りにショックを受けるが、アルフォンソにそそのかされて、グリエルモの恋人フィオルディリージを口説くことに成功。フェルランドとグリエルモは、恋人の裏切りに激怒するが、アルフォンソに“女はみんなこうしたもの（コジ・ファン・トゥッテ）”だとなだめられる。

さてその後……。姉妹は変装した二人と結婚契約書を交わすが、戦争に行ったはずの士官二人が帰ってきて、その契約書を見て怒ってみせる。慌てふためく姉妹にフェルランドとグリエルモは種を明かす。姉妹は許しを請い、士官二人はもう恋人を試すようなことはしないと誓う。ドン・アルフォンソは、みんな笑い飛ばしてしまおうと恋人たちをねぎらう。

出演者

主要出演者の内、ドン・アルフォンソ役以外は全員 35 歳前後、ムーティは 42 歳の若さ。

マーガレット・マーシャル(1949 -)は英国・スコットランド生まれのソプラノ歌手。

アン・マレイ(1949 -)はアイルランド生まれのメゾソプラノ歌手。カナダ生まれのポップス歌手は別人。

ジェームズ・モリス(1947 -)は米国生まれのバリトン歌手。メトロポリタン歌劇場で活躍。

フランシスコ・アライサ(1950 -)はメキシコ生まれのテノール歌手。ザルツブルク音楽祭常連出演者。

キャスリーン・バトル(1948 -)はアメリカ生まれのソプラノ歌手。メトロポリタン歌劇場で活躍、彼女が歌った「オンブラ・マイ・フ」はコマーシャルでも有名になった。

セスト・ブルスカンティーニ(1919 - 2003)はイタリア生まれ、戦後を代表するバス・バリトン歌手。

リッカルド・ムーティ(1941 -)はイタリア・ナポリ生まれの世界的指揮者。



マーシャル



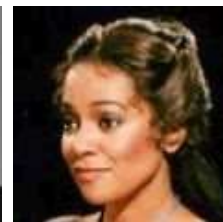
マレイ



モリス



アライサ



バトル



ブルスカンティーニ



ムーティ

作曲と上演経過

「コジ・ファン・トゥッテ」は、「フィガロの結婚」、「ドン・ジョヴァンニ」に続く、モーツァルトと台本作者ダ・ポンテのコンビによる第 3 作である。本作は前 2 作と異なり、直接的な原作は見つかっていないし、作曲に至る経過は諸説あるが真相は不明のまま。

初演はモーツァルトの死(1791)の前年、ウィーンの宮廷歌劇場である。オーストリア皇帝ヨーゼフ 2 世が病気で臨席せず、直後に他界したため劇場は一時閉鎖。その後は 19 世紀半ばまで上演されなかった。しかし現在、本作は前 2 作に劣らぬ名曲として世界中の歌劇場で親しまれている。

それまで作品として評価が低かった「コジ・ファン・トゥッテ」が、ザルツブルク音楽祭 1960 - 70 年代に、ギュンター・レンネルト演出、カール・ベーム指揮の公演で極めて高く評価され、(小澤征爾が指揮した一時期を挟んで) 前後数十回も公演された。忘れられていた「コジ・ファン・トゥッテ」が復権し、ベームのドイツ風演奏と、ウィーン風の軽妙で洒落た上品な作品イメージが定着した。

1981 年にカール・ベームが 86 歳で死去し、ザルツブルク音楽祭をベームとともに支えてきたヘルベルト・フォン・カラヤンが音楽祭を牽引することになった。カラヤンは、ザルツブルク初登場となる演出家ミヒャエル・ハンペと、オペラの舞台と同じナポリ出身の若いリッカルド・ムーティを起用して本公演を準備した。それまでのベーム色を一掃し、あらたな「コジ・ファン・トゥッテ」を世にだした。

それまでのウィーン風から、ナポリ風、イタリアオペラ風に変貌した、祝祭小劇場初日(本公演の前年)は大成功、本公演を含めて 1991 年まで合計 38 回も上演され絶大な人気を博した。

タイトルの余談

歌劇のタイトル「女はみんなこうしたもの(コジ・ファン・トゥッテ)」は、「フィガロの結婚」第 1 幕の 3 重唱でドン・バジリオが歌うセリフをもとにしている。

音楽之友社と全音楽譜出版社では本作を「**コシ**・ファン・トゥッテ」と統一表記している。公演関係では「**コジ**・ファン・トゥッテ」と表記されるのが一般的。”così”(英語の”so”、そのように)や”casa”(カーサ、家)のように”s”の前後が母音で挟まれると、北イタリアでは一般的に「ズ」、トスカーナ地方やローマ、南イタリアでは「ス」と発音されることも。本作の舞台は南イタリアのナポリだから「コシ」のほうが「正しい」のかもしれないが、本公演でも「**コズィ**」と発音している。